

浅間山の生立ち

浅間山は10万年前から何度も噴火をくりかえしてきた活火山です。



歴史時代の主な噴火災害

昔の記録に残っている浅間山の噴火災害のうちとくに被害が大きかったものを紹介します

天明の噴火

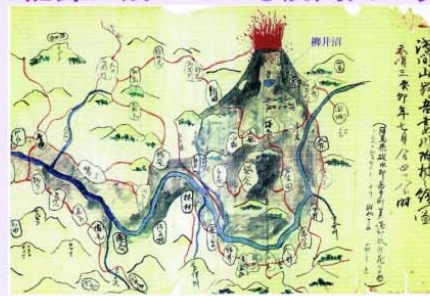
天明の噴火は、1783(天明3)年5月9日*に始まってから、噴火したり収まったりを繰り返しながら、次第に活動が大きくなっていきました。7月27日*頃から噴火が連続するようになり、8月4日から5日*にかけて、最も激しい噴火が起こりました。(※新編)

発生した現象	火山灰 ・ 噴石 ・ 吾妻火砕流 ・ 鎌原土石なだれ ・ 天明泥流 ・ 沓掛泥流 ・ 鬼押し出し溶岩流
主な被災地域	山麓の鎌原集落 ・ 軽井沢町(当時の軽井沢宿) ・ 吾妻川沿いの地域
死者	・ 1400名以上
倒壊家屋	・ 1000棟以上

天仁の噴火

1108(天仁元)年にも、浅間山は大噴火を起こしました。古い時代のことなので天明の噴火ほどの記録は残っていませんが、中御門右大臣藤原宗忠の書いた「中右記」に噴火のときの様子が記されています。

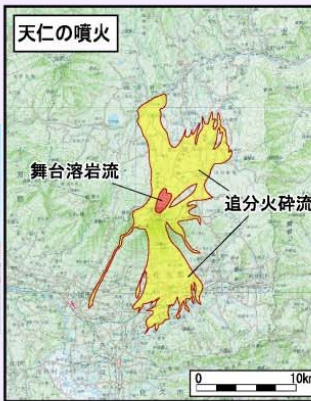
発生した現象	火山灰(前橋で20センチメートル以上の厚さに積もりました) ・ 噴石 ・ 追分火砕流(約80平方キロメートル以上を覆いました) ・ 舞台溶岩流 [火山噴出物の量は天明の噴火の2倍以上]
--------	--



「国内に麻間峯という高山がある。治暦年間に煙を噴いたが、その後しばらく収まっていた。天仁元年七月二十一日に猛然と噴火を始め、煙は天まで登り、砂礫は国内に降りそそぎ、国内の田畑は全滅してしまった。一国の被害でこれほどひどい例は未だかつてない。稀な不思議の事件なので記し置くものである。」
十旧暦 「中右記」の現代語訳

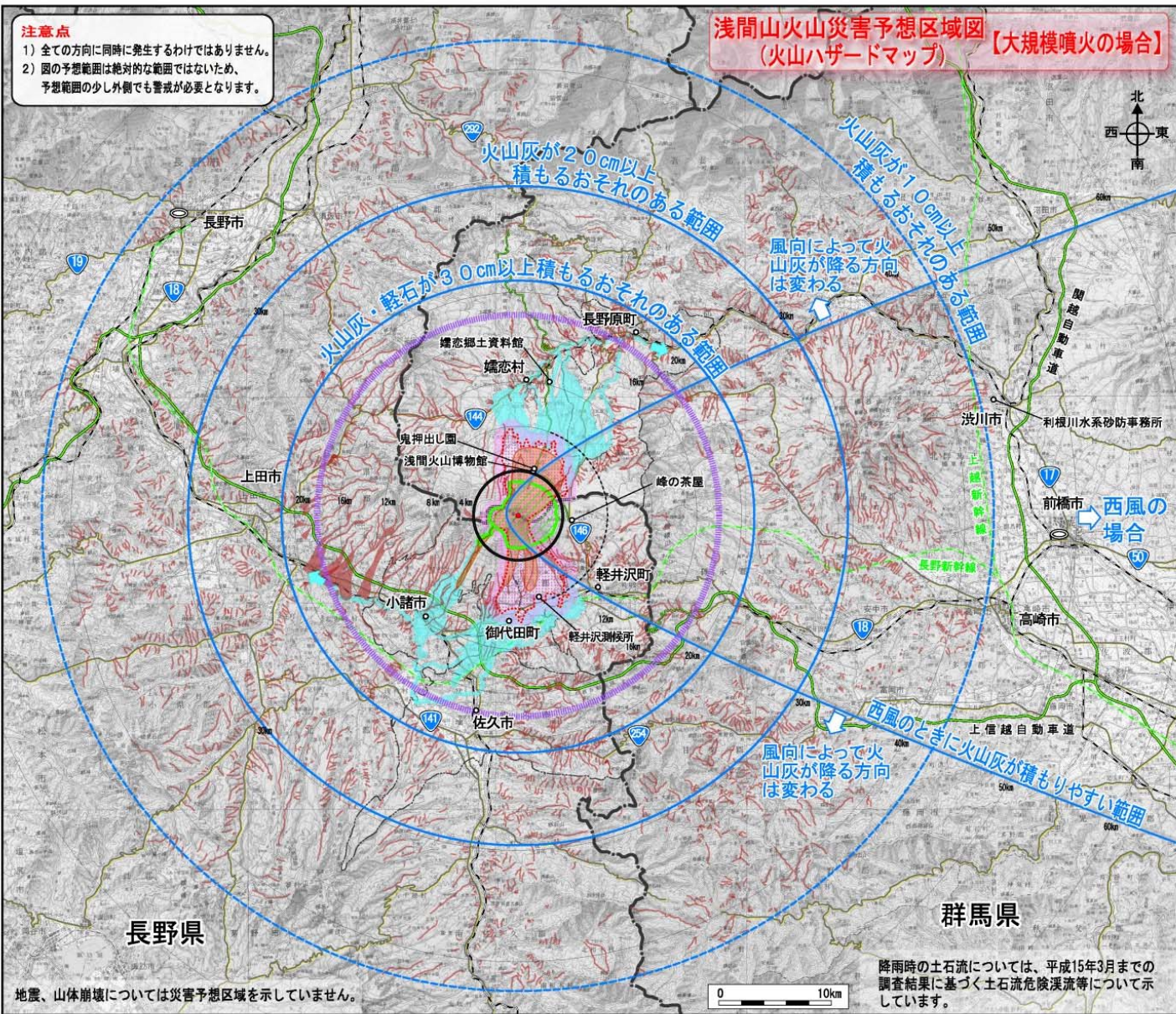


天明泥流の流下範囲
1783(天明3)年の噴火で発生した泥流の流下範囲を示しています。
天明泥流が発生の原因になった「鎌原土石なだれ」の流下範囲を示しています。

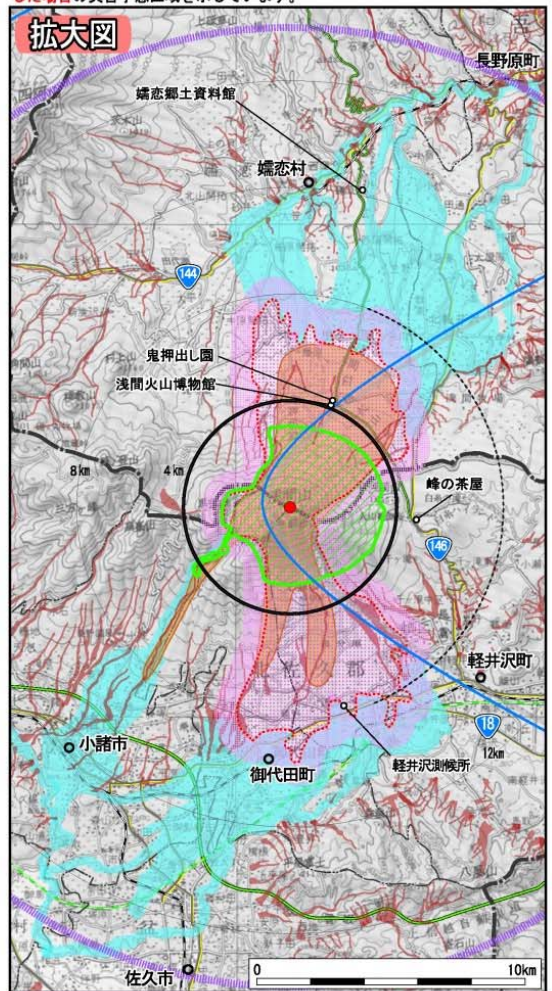


もしも天明の噴火のような大噴火がおきたら...

浅間山は過去2千年間に3回の大噴火を起こしました。たくさんの被害を出した「天明の噴火」もそのうちの一つにあたります。



この欄に示す2枚の予想図は、天明の噴火と同じような大規模な噴火が、浅間山の山頂火口から北側(群馬県側)あるいは南側(長野県側)に向かって発生した場合の災害予想区域を示しています。



浅間山では、天明の噴火よりも大きな規模の噴火が起こることもあります。例えば、天仁の噴火は天明の噴火の2倍以上の規模でした。もしも、天仁の噴火のような大規模な噴火が起きた場合には、左の図に示したよりもさらに広い範囲に火砕流や融雪型火山泥流の被害がおよぶと予想されます。

記号の色と意味	想定火口	火山ガス	噴石	空振	火山灰(降灰)	降雨時の土石流	火砕流と熱風	融雪型火山泥流	溶岩流
	浅間山の山頂火口を想定しています。	高濃度のガスが溜まりやすい予想範囲です。	実線: こぶしより大きい噴石が飛んでくる予想範囲です(半径4km)。破線: 風下側で小石が飛んでくる予想範囲です(半径8km)。	空振による被害を受ける予想範囲です(半径18km)。	火山灰が積もる予想範囲です。大規模噴火の時には軽石も混ざって降ります。	降雨時の土石流の流下予想範囲です。	火砕流と熱風の流下予想範囲です。	積雪期の融雪型火山泥流の流下予想範囲です。	溶岩流の流下予想範囲です。

